

同志社大学  
2018 年度 卒業論文

論題：学生の講義中における逸脱行動の発生要因について

社会学部社会学科  
学籍番号：19151052  
氏名：篠原 夏実  
指導教員：立木 茂雄教授  
(本文の文字数：21772 字)

## 要旨

### 学生の講義中における逸脱行動の発生要因について

学籍番号：19151052

氏名：篠原 夏実

大学生活において学生の講義中の態度の悪さが気になった筆者自身の体験をきっかけに、講義中の逸脱行動の発生要因について研究したいと考えた。そこで、本稿ではそれぞれの先行研究で逸脱行動に強く影響しているといえる「規範意識」「社会的スキル」「学生重視の価値観」などの個人特性と、「私語」「居眠り」「うわの空」などの「逸脱行動」との関係性に注目し、仮説をたて、それらを明らかにすることを目的とした。

調査には先行研究をもとに作成した「学生生活に関する意識調査」を用いて私立、国公立大学の男女を対象に調査票を配布し、SPSSを用いて相関分析・重回帰分析を行った。その結果、注目していた規範意識の高さは逸脱行動の発生に影響しているとはいえず、「高校時代の逸脱行動」「学生重視の価値観」が高い学生ほど、大学における逸脱行動が多いことが明らかになった。「逸脱行動」項目ごとの結果からは、やや異なる結果が得られた。

キーワード： 逸脱行動, 規範意識, 高校時代の逸脱行動

## 目次

はじめに .....	4
1 高等教育・大学教育について .....	4
1.1 大学教育の目的と現状 .....	4
1.2 課題に対する取り組み .....	2
2 先行研究 .....	3
2.1 講義中における逸脱行動の要因について(内的要因) .....	3
2.2 講義中における逸脱行動の要因について(外的要因) .....	7
2.3 目的 .....	7
3.調査方法 .....	8
3.1 調査概要と対象 .....	8
3.2 調査項目 .....	8
3.3 分析方法 .....	12
4.調査結果 .....	12
4.1 記述統計の結果 .....	12
4.2 相関分析の結果 .....	16
4.3 重回帰分析の結果 .....	18
5.考察 .....	20
5.1 相関分析の考察 .....	20
5.2 重回帰分析の考察 .....	21
6. 結論 .....	22
7. 参考文献 .....	23

## はじめに

大学の講義中において、私語や居眠り、携帯を触る学生はよく見られる。あるいは、講義中に堂々と腕を枕にして睡眠をとる学生や、携帯で動画を見る学生を目にすることも珍しいことではない。このような行為は、現在の大学の講義ではよく見られる光景である。実際に、筆者自身が大学に4年間通っていて、このような講義中の態度に関する問題は頻繁に確認できた。これらの行為に共通していることは、騒ぐ、授業妨害をするなどの行為とは違い、一般的には逸脱行動とまでは言えない行為者の不真面目な行為であるということである。また、行為によっては必ずしも悪いとは言えないが、時と場合によって他者の迷惑となり、ふさわしくない行為だといえる(福田舞 2009)。彼らまたは彼女らは、どのような要因により、私語や居眠り、携帯操作などの不真面目な行動をとるのだろうか。一般的に考えると、周囲に迷惑をかけないような軽微な逸脱行動の発生要因は、本人の学習意欲の無さによるものだといえる。しかし、学習意欲の有無以外に講義中の態度、行為における要因を探るべく、筆者自身の経験を振り返ってみると、周囲の学生が真面目に講師の話聞いてノートをとるなどして、受講態度が良ければ、その行動に筆者自身も感化され、周囲の行動になんとなく自らの態度を合わせるということもあった。また、その反対に、周囲の学生が全体的に携帯を触る、私語をするなど不真面目な受講態度であった場合は、筆者自身もなんとなく気が緩み、不真面目な行動に至ってしまったという経験もある。このことから、学生の講義中の態度の要因は、行為者自身の問題だけでなく、講義内にいる他者の行為の影響があるのではないかと思われた。以上のように、筆者自身の学生生活の経験がきっかけとなり、講義中の学生の行動要因について興味を持った。

このように、講義中の学生や生徒あるいは児童の態度の原因が、講義室の温度など環境によるもの、学生の体調によるもの、教師の表情によるものとなっている研究は見られたが、講義中の学生の行動をその場にいる友人以外の他の学生の行動と結びつけて分析する研究は比較的少なく、研究の余地があるといえる。また、本稿では、簡潔な表記のために携帯を触る、居眠りをするなどの、一般的に考えて軽微な逸脱行動のことを「逸脱行動」とし、後に具体的な行為を明記する。

## 1 高等教育・大学教育について

### 1.1 大学教育の目的と現状

まず、高等教育・大学とは本来どのような役割を担うべき場所なのかということを再確認したい。文部科学省(2009b)によると、21世紀の現代は、「知識基盤社会(knowledge-based society)」であり、知識の進展による旧来のパラダイムの転換に対応するべく、幅広い知識と柔軟な思考による判断を下せる人材が必要である。このような社会における高等教育の役割は、人格の形成や能力の開発、知的生産活動など非常に幅広いが、中等教育後の学習機会の柱となり社会を先導していくことである。さらに、活力のある社会が発展し続けるために、専攻分野の専門性を高めるだけでなく、幅広い教養を身につけ、高い公共性や倫理性も保持している人材が多数必要である。そのような人材を育成し、輩出していく場

でなければならない。また、大学は高等教育機関の中核である。深く心理を探究し、専門の学芸を研究する場所であり、そのために一定の自主性・自律性が承認されている。とはいえ、技能や知識の習得のみが目的ではなく、全人格的な発展の礎を築くことも大学の役割の一つだといえる。さらに現在では、大学に期待される役割も変化しつつあり、大学の、地域社会や国際社会への貢献の重要性が強調されるようになってきている(文部科学省 2009b)。このように見てくると、大学は人々が社会に出る前の最後の教育の場として専門性と汎用性の二つを学ぶ、個人にとっても社会にとっても重要な役割を担っていることがわかった。そのため、大学で見られる講義中の逸脱行動についての研究は、意義のあるものだといえる。

そもそも大学設置にはいくつかの基準が定められているが、文部科学省は、「大学の目的との関係」という項目で、「大学は、学術の中心として、広く知識を授けるとともに、深く専門の学芸を教授研究し、知的・道徳的及び応用的能力を展開させることを目的としており」、これを公的な質保証システムを検討するための方法として、「社会的・職業的自立をはかるために必要な能力を培うための体制」としている。さらに、各大学では学生の豊かな人間形成、将来の人生設計に役立つことを目的として、学生の卒業後の職業意識の形成支援を行なわれている。このようにみると、大学とは社会に出る前の学生のために、人間形成や人生設計に貢献するような幅広い知識とともに専門的な知識まで得ることができる場所であることを目的としているようである(文部科学省 2011)。そのためここで、実際に目的は十分に達成されているのかどうかをみていく(文部科学省 2016)。

大学教育の現状を知る一つの目安として学修時間の現状を参考にすると、日本の学生の学修時間の平均は、授業が1週間のうち20時間以下の者が約7割で、1日平均約3時間程度ということになる。授業に関する1週間の平均学修時間は0時間が全体のうち2割、1～5時間が5割を超えている。講義を受ける時間も短く、さらに自主学修の時間は半数がほとんどしていないということになる。ここから考えられることは、まず、大学の講義の内容が学生にとって自主学修の必要性を感じないという可能性がある。あるいは、学生に自律性が身につけていないため、本来必要な自主学修が行われていない可能性も考えられる。

## 1.2 課題に対する取り組み

このような学生の学修状況の改善のための効果的な対策としては組織的な教育体制の構築が必要であり、そのためには個々の教員の授業内容を改善が求められる。そこで、具体的な方法としてはそれぞれの大学の教育理念、教育目標や教育内容、方法について組織としての研修をすることが重要だ。このような大学の取り組みを「ファカルティ・ディベロップメント(FD)」という。FDの具体的な取り組みは、講演会やシンポジウムは多くの大学で行われているようだが、その他にも授業検討会教員相互の授業参観の実施やワークショップの開催などがある。とくに、学生の「能動的学修(アクティブ・ラーニング)」が推進されていることから、ワークショップ形式のFDの実施は効果が期待できそうである(文部科学省 2009a)。

また、文部科学省(2011)は、「大学制度は過去数十年の様々な歴史的経緯やその際の事情に応じて整備されており、21世紀において大学制度を進展させるためには、現行の制度や施策をあらためて検証し、そのよって立つ基盤の現状を再確認することが不可欠である」

としており、高等教育現場の現状を把握し、それを大学制度のさらなる発展に役立てることの必要性を述べている。本節で述べたような現状をふまえた上で高等教育・大学の存在意義や目的を達成するためには、大学教育の主な部分である講義の現状を知り、さらなる改善に向けた対策が必要だと思われる。本稿において具体的な方策を示すために、まずは次章ですでに教育現場において行われている実証的な研究を挙げていく。また、行動要因を、環境や周囲の人間などがはたらきかける外的要因と、行動を起こすその人の気持ちなどの内面が行動に作用する内的要因に分けて考え、学生が講義中にとる行動との関連について検討する。

## 2 先行研究

### 2.1 講義中における逸脱行動の要因について(内的要因)

#### (1) 学生重視の価値観

逸脱行動の発生を内的要因に着目してみると、個人特性が挙げられる。ここからは、個人特性と逸脱行動発生との関係性についての先行研究をいくつか挙げていきたい。

まず、非行や自己中心的な迷惑行為の要因を検討する研究で福田(2009)は、現代青少年の逸脱行動と、その背景要因について、現代の青少年らの、即時的な欲求を満たそうとする刹那主義的な感覚が、10代であることに重要な価値を置く「10代重視の価値観」との結びつきがあるとしたうえで、このような価値観を持つに至るには「時間的展望」(白井利明1991)という感覚の有無が関係しているとの見方を示している。時間的展望というのは、より遠くの将来や過去の事象が現在の行動に影響を及ぼすという感覚をもつことである。

また、私語のような自己中心的な迷惑行為の性別比較をすると、男子よりも女子において、それらの行為が友人関係の中で誘発され、その場の軽いノリで行われる可能性があるという。この背景については、長沼恭子・落合良行(1998)の大学生を対象にした調査より、男子は自立化傾向が強く、女子は親密化傾向が強いと述べられている。福田も、この長沼・落合の見解を肯定的に解釈し、同趣旨の見解を述べている。さらに、福田は、逸脱行動の経験値と関連の強い意識を明らかにするために、逸脱行動の経験値を目的変数、「逸脱行動に対する意識」、「内的統制観」、「10代重視の価値観」、「規範意識」を説明変数として、重回帰分析を行った。その結果、逸脱行動の経験値との関連が変数は最も強かった項目である「10代重視の価値観」に加え、「逸脱行動に対する意識」、「規範意識」があった。また、青少年にとっての10代であることの価値がどのようなものであるかを検討するため、「10代重視の価値観」の各項目について重要度を「そう思う」「ややそう思う」「ややそう思わない」「そう思わない」で尋ね、分析している。その結果、「10代のうちに、遊べるだけ遊んでおくべきだ」は「そう思う」「ややそう思う」が約9割であり、その次に「ずっと10代でいたい」が約7割であった。これらの項目は青少年にとって重要度が高いと思われ、青少年にとって10代が人生の中で重要な時期だという認識になっていることが明らかである。また、福田はこの結果から、『ずっと10代でいたい』という想いの背景には、大人になり、社会に出ることに関して何かしら否定的なイメージを抱いている可能性がある(福田 2008:336)と述べたうえで、生徒らが10代に価値を感じることは、10代のうちに遊んでおくべき、という考えが、10代のうちならば多少の非行も許されるという感覚に結び

ついているのではないかという指摘をしている。この、社会に出ることに関して否定的なイメージを持っているという点については、青少年らが時間的展望を有しているということであり、だからこそ「今のうちに」という考えが芽生え、結果として非行や逸脱に至るという説明が可能である。また、青少年のこのような心理状況については、アメリカの心理学者・エリクソンのいう、モラトリアム期間だといえ、彼は「大人としての責任をもつことの遅延」としている(Erikson 1968=2017: 191)。自分の生き方を模索し大人への準備をする期間であるという意味では、学生時代も一つのモラトリアム期間といえ、社会人という一つの区切りが生じる大学生にこそこのような「今のうちに」という感覚が生じるのではないかと思われ、本研究における比較対象として適切な概念であると思われた。

筆者が予定している研究では、逸脱行動の経験値との関連が強かった他の2項目、「逸脱行動に対する意識」、「規範意識」にも注目したい。この2項目は、「電車内で電話をする」といった「自己中心的な迷惑行為」との関連が強く、迷惑行為に対する抑制となる。これらの意識については、道徳性が影響していると考えられるため、デュルケム(1964)の「道徳性の諸要素」を参考にして考えていきたい。デュルケムによれば、道徳の規則によって導き出される行為は、すべて非個人的な目的の追求、つまり集団の利益のために振る舞うことだとしており、これは「規律の精神」に基づくものである。また、「非個人的な目的」とは個人を超える、「超個人的な目的」だとして、これが集合的な利益を優先させようとする「社会集団への愛着」によって成るものだとしている。ここでは、集団の利益を優先させ、そのために振る舞うという道徳性が規範意識を構築するものだといえる。そのため、迷惑行為は集団の利益にはならないので、抑制の力がはたらいたといえる(麻生ほか 1964)。

また、福田(2009)は研究の中で、講義中における逸脱行動とはいきれない行動のことを、「軽微な逸脱行動」としているが、先述のとおり、本稿においては一般的には逸脱行動とはいきれない軽微な逸脱行動のことを「逸脱行動」としている。具体的には、①私語②居眠り③携帯の操作④うわの空⑤他の講義の課題をする⑥食事の6つの行為を逸脱行動として定義し、考えられる要因との関連性を明らかにしたい。

## (2) 社会的スキル

また、講義中の迷惑行動の中でも初等教育から高等教育まで見られる私語に着目した研究では、その発生要因について、

私語という迷惑行為に対しては、行為者がもっている規範意識のみならず、視点取得・社会的スキル・大学生活の目的という諸変数が複雑に絡みあいながら影響を与えている(吉田ら編 2009: 138-139)

と考えられている。ここでいう視点取得とは他者の視点にたち、他者を理解しようとする力のことで、社会的スキルとは対人関係を円滑に進められる能力のことをいう。この研究では私語の種類を、授業に關係のある私語と關係ない私語に分けており、「学問の習得」を重視する者であっても、「対人關係の構築」も重視するとなると、「授業に關係のある私語」は頻繁に起こるといふ。これは、「授業に關係する私語」と「学業に對する適應感」の間

に正の相関が示されており、授業に関する私語は、学業に対する適応を低下させることなく対人関係の維持も可能となるからだと思われる。つまり私語の発生は、対人関係の維持のためではないかと考察しており、社会的スキルや視点取得などの社会的に望ましいとされる特性が高いほど、私語の発生頻度が高くなることを示している。さらに、出口拓彦・吉田俊和(2005)は、私語の発生要因には規範意識と社会的スキルの相互作用についても注目しているが、結果としては、社会的スキルの高い者は規範意識の高低にかかわらず、授業に関係のない私語である「無関係私語」をするという結果により、私語に対して、「してはいけないことだ」という認識をしているにもかかわらず、実際には私語をしていることが明らかになった。なぜこのような事態になるのかがこの研究での課題点となっているが、これには個人特性が考えられる。

しかし、この研究については私語という頻繁に見られる逸脱行動の要因に焦点を絞っており、私語の評価的側面にまで考察を向けたことは社会秩序の維持に貢献できる研究だと言え、その点は評価できる。しかし、教育学的な問題では、改善すべき講義中の学生の態度は私語だけでなく、この研究だけでは不十分である。研究の結果から、私語の頻度の多さは対人関係に対する適応のためである可能性が示唆され、社会的スキルが大きな要因といえることがわかった。しかし、社会的スキルが要因となる逸脱行動は、私語以外には当てはまらないように思われる。そこで、私語以外の行動に関しては規範意識の高低など他の個人特性の影響の有無を調査する必要がある。

### (3) 記述的規範・命令的規範

このように、規範意識は私語以外の逸脱行動の要因として強く影響する可能性があると考えられる。北折充隆・吉田俊和(2000)は、違反を抑止するためのメッセージの提示が、社会規範からの逸脱行動に及ぼす影響について研究しており、その中で二つに分類された規範意識の概念を用いて違反抑止メッセージの効果を説明している。まず、研究の内容について触れておくと、大学構内の、駐輪違反が目立つ場所で5つに分類した違反抑止メッセージを提示し、それらの相対的効果を比較するものとなっている。実験は3つに分かれており、実験1では違反抑止メッセージの看板を設置するのみで、実験2と実験3では2つの看板の間に、自転車をあらかじめ止めることで、駐輪違反者がいることを顕示した。違反抑止メッセージは、研究の中の予備的検討により、①普通に禁止②強い禁止③被害の提示④制裁の提示⑤同調の抑止の5つに設定されている。

この研究の中の3つの実験を通して得られた結果は、違反抑止メッセージの効果は周囲の行動に大きく影響されるということであった。つまり、実験1と、実験2実験3の間で駐輪違反者の数に違いが出たのである。北折・吉田(2000)はこの結果に対して Cialdini, Kallgren, & Reno(1990)の、命令的規範(injunctive norm)と、記述的規範(descriptive norm)の概念を用いて説明している。

社会規範を多くの人々が適切・不適切と知覚することに基づく、いわば当為的な命令的規範(injunctive norm)と、多くの人々が実際の行動としてとるであろうとの知覚に基づく、行為的な記述的規範(descriptive norm)の2つに分類している。



この概念を用い研究の結果を説明すると、実験1では駐輪違反者がいないということが記述的規範として作用し、違反抑止メッセージとの相乗効果で駐輪違反を防止することができた。しかし、実験2や実験3ではあらかじめ止めておいた自転車がその場の記述的規範となり、それに従う形で駐輪違反をする学生が増えてしまった。

また、違反抑止メッセージの提示方略の差は、少数逸脱者を顕示した状況においてのみ確認できたが、効果については制裁提示でさえ「状況依存的」であり、逸脱者の数が増えれば効果が弱くなってしまうことが明らかになっている。

この研究で用いられているような規範の分類は、他にもいくつか確認できるものがある。例えば、小林久高(1991)によると、規範は社会的規則(social rule)と社会的期待(social expectation)という性質の異なる2種類のものがある。社会的規則とは、社会集団の成員全体の意識を超えて存在しており、全成員がその規範の存在を忘れていても規範自体はなくなる。この社会的規則の例として小林は、法規範を挙げている。一方、社会的期待とは成員の意識を実質的な内容としており、社会集団の成員全体が考えている「望ましい行為」がこの規範となり、暗黙のムードや生産水準規範のようなものである。先述した、デュルケムのいう「社会集団への愛着」と類似しており、暗黙のムードが超個人的な目的となり、その集団内における「望ましい行為」に至るのだと考えられる。

次に、Cialdini, Kallgren, & Reno(1990)の規範の定義には、状況要素が含まれている。すなわち、規範はどのような状況のもとで行動に影響を与えるのかということである。Cialdiniらは規範的行為の焦点理論(focus theory of normative conduct)を提唱し、そのなかで社会規範を命令的規範(injunctive norm)と、記述的規範(descriptive norm)の2つに分類している。この2つの概念の具体的な説明は先述のとおりである。また、Cialdiniの提唱する原理の中に、社会的証明(social proof)と呼んでいるものがある。「私たちは他人が何を正しいと考えているかにもとづいて物事が正しいかどうかを判断」(Cialdini 2001=2010: 189)しているのである。そしてこの原理は特定の状況において、ある行動を行う人が多ければ多いほど、それが正しい行動となる。例としては映画館などにおいてポップコーンの空箱をどうするか、高速道路ではどれくらいのスピードで走るのかということが挙げられる。これは状況記述的規範(descriptive norm)の概念と類似している。

このように、規範の定義は様々な論文で示されているが、本稿で用いる学生の講義中の行動要因の説明としてはCialdini, Kallgren, & Reno(1990)の命令的規範(injunctive norm)と、記述的規範(descriptive norm)の概念が最適だと考えられる。なぜなら、状況により変化する規範の概念に加え、一般的な道徳の意味の規範概念があり、比較可能だからである。さらに、講義には大人数と少人数で行われるものがあるが、本稿で扱う逸脱行動が見られるのは一般的に大人数講義であることが多い。大人数講義は学部や学科、所属集団の異なる学生が集まる場所であり、そのような他者の行動を説明するには「集団の共通意識」を用いることが難しいと思われる。一方で、焦点理論(focus theory of normative conduct)における、規範の与える影響の状況依存性は講義の状況における規範の成立に用いることができると考えられる。

## 2.2 講義中における逸脱行動の要因について（外的要因）

### （1）逸脱者の有無

これに加え、先述の先行研究を補完するような研究がある。出口(2014)は、学生の規範逸脱行動と、行動基準や逸脱頻度、規範意識との関連を検討した。決定打列(decision matrix)を援用したコンピュータシミュレーションを行っている。具体的には、「自分」と「周囲」の人々が規範に対して「遵守する」か「逸脱する」かという状況に分類し、それらの状況に対する態度について分析していく。研究結果より、講義中における逸脱行動の発生は、自分が規範を遵守している状況であるかどうかよりも、相手・自分にかかわらず、逸脱者が存在している状況であるか否かが逸脱行動の頻度や規範意識の関連の方向性を規定している。さらに、この結果の教育への実践的な応用も示している。学生の多くは、授業中に行う逸脱行動である「メール」や「居眠り」について、規範を破っても遵守しても満足度に変化が見られない。そのため、抑制方法としては逸脱行動を行わない場合の学生の満足度を向上させる必要がある。また、他の研究でも多くなされている私語については、記述的規範の影響を受けやすいため、私語に対する規範意識の向上だけでなく、周囲の状況に流されないようにする必要が有る(出口 2014)。

また、このように研究対象になる逸脱行動も私語やメール、居眠り、秘密漏洩、ポイ捨ての5つの態度についてであり、これまでの、教育現場での逸脱行動の研究対象を私語のみとしたものと比較して、新たな知見の獲得が期待できる。

## 2.3 目的

これらの先行研究は、それぞれ別の概念が逸脱行動に最も影響を与えたという結果になっている。そのため研究の意義があると思われるのは、まず、逸脱行動は内的要因と外的要因のどちらが強く影響を及ぼすのかという研究である。言い換えると、行為を行う本人の個人特性によるものであるか、講義室内にいる他者の逸脱行動の認知によるものかを明らかにしたい。さらに、先行研究では逸脱行動の対象を私語とするものが多く見られたが、本稿では私語以外に実際に講義で見受けられた他の行動も研究対象にしたいと考える。よって、この研究では以下のように仮説を立て、それを明らかにすることを本稿の目的とする。

仮説 1) 逸脱行動の発生には、社会スキルよりも、逸脱行動の有無の認知がより強く影響する。

仮説 2) 逸脱行動の発生には、学生重視の価値観よりも、逸脱行動の有無の認知がより強く影響する。

仮説 3) うわの空の発生には、命令的規範意識の高低が最も影響を与える。

### 3.調査方法

#### 3.1 調査概要と対象

本研究で用いる概念図を以下に示す(図1)．この概念図の説明としては、まず、多くの研究で用いられている規範意識が逸脱行動にどのような影響を与えるのかということに加え、先述の各先行研究の結果において逸脱行動に最も影響を与えたとされる変数を一つの研究で比較することで、本当に逸脱行動の発生に影響している原因を探るために作成された．なお、「高校時代の逸脱行動」については過去と現在の行動を比較する視点も必要だと考え、概念図に追加した．そして、この概念に対応するように、調査票の項目を作成した．

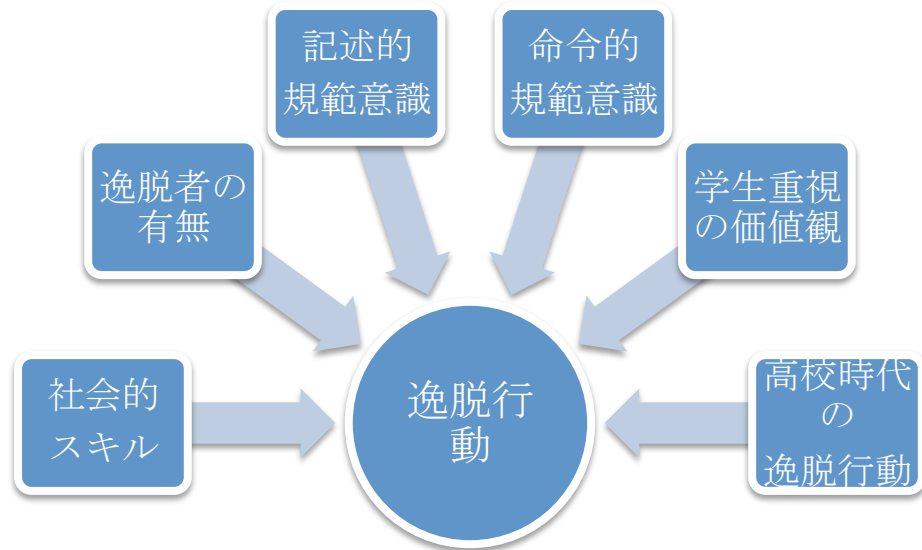


図1 逸脱行動と要因の関係についての概念図

調査には、2018年10月下旬～11月中旬に大阪の国公立大学1校、私立大学1校、京都の私立大学1校の計3校の学部生男女を対象に行った「学生生活に関する意識調査」の結果を用いる．同志社大学は私学ということで、比較のため国公立大学での質問紙配布に至った．また、より偏りのない研究にするため、もう1校私立大学で質問紙を配布した．この調査は質問紙調査であり、質問紙は講義あるいは部活やサークルなどのグループで配布し、その場で回収した．調査は「人材育成の場である大学での学びをより豊かなものにするために、学生の講義に対する意識や講義中の実際の行動などの現状を把握する」ことを目的として実施された．標本数は110であり、回収数は95(回収率=86%)であった．続いて回答者の特性を示す．回答者の性別は、男性が55.2%(n=53)、女性が43.8%(n=42)であった．年齢について本調査では記入式でたずねている．ただし、調査対象が大学生であるため、ある程度年齢の範囲が限定される結果となった．回答者の割合は、18歳が2.1%(n=2)19歳が11.5%(n=11)、20歳が30.2%(n=29)、21歳が32.3%(n=31)、22歳が16.7%(n=16)、23歳が5.2%(n=5)、24歳が1.0%(n=1)であった．

#### 3.2 調査項目

調査項目は、先行研究をもとに筆者が作成した逸脱行動と、考えられる要因に沿って作成した．本研究で独立変数となる逸脱行動の要因は、記述的規範意識、命令的規範意識、

社会的スキル、学生重視の価値観、高校時代の授業態度、逸脱者の有無の6つである。一つの変数に対し、項目数は最小で6、最大で13作成した。回答方法は問10の年齢を問うものは先述の通り記述式であるが、それ以外は選択式であり、選択肢は基本的に「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」「どちらかといえばあてはまらない」「あてはまらない」の4つから1つを選択するものとなっている。

まず、記述的規範意識については、横田晋大・中西大輔(2011)により邦訳された、Merabian & Stefl(1995)のThe Conformity Scaleの同調思考尺度の項目を使用、一部変更し、問5「③私は人に従いがちである。」「⑥仲間の中で、自分だけ意見が違くと不安になる」など6項目から成っており、集団の中での回答者の行動や考えを尋ねるパーソナリティ尺度を用い、記述的規範への従いやすさを測定しようとした。また、同調思考尺度である「私は、自分が従うことのできるグループを見つけるより、むしろ人生で私自身の道を作ることがを好む」が、プリテストを行い調査票に回答してもらった際、項目の意味が分かりにくいという意見が見られたため、問5「②私は、自分が従うグループを見つけるより、むしろ人生で私自身の道を作ることがを好む」というややシンプルな表現に変更した。

**表1 記述的規範意識に関する質問項目**

番号	項目
①	私は、容易には人には従わない。
②	私は、自分が従うグループを見つけるより、むしろ人生で私自身の道を作ることがを好む。
③	私は、グループの基準に従いがちである。
④	自分の主張を押し通して場を乱すぐらいなら、何も言わない方が気が楽である。
⑤	話し合いの中で周りが意見を変えても、私は最後まで意見を変えない。
⑥	仲間の中で、自分だけ意見が違くと不安になる。

命令的規範意識については、問3にある、手島啓文・安保英雄(2017)の「ルール・マナーの遵守」5項目を使用したものと、独自作成の2項目、問4にある独自作成の6項目合わせて13項目から成る。「ルール・マナーの遵守」項目も、記述的規範意識の項目と同様、パーソナリティを尋ねる項目となっている。この項目の使用に至る経緯としては、Cialdini, Kallgren & Reno(1990)のいう命令的規範(injunctive norm)に対し、北折・吉田(2000)は、命令的規範とは、社会規範の中でも、多くの人々が適切・不適切と知覚することに基づくあるべきとされる規範だと訳しており、これは社会のルールやマナーの遵守にあたると思われるためである。

**表2 命令的規範意識に関する質問項目1**

番号	項目
①	法や決まりを進んで守る。
②	規律ある安定した社会の実現に努める。
③	安全で調和のある生活を望む。
④	自分の父母や祖父母を尊敬し、愛情を持って接する。
⑤	節度を守り、節制に心がけて行動する。
⑥	自分がやりたくないことは人にやらせる。
⑦	自分にだけ利益があるような嘘をつく。

また、問4「①交通量の多い場所で、赤信号で横断歩道を渡っている」「②駐輪禁止場所で駐輪をしている」「③電車内で通話をしている」などは、学校以外の場所で日常生活においてよく見られる、身近で実際に起こり得る逸脱行動を目撃した場合に、回答者がどのように感じるかを尋ねることで命令的規範意識の高低を測定する項目になっている。

**表3 命令的規範意識に関する質問項目2**

番号	項目
①	交通量の多い場所で、赤信号で横断歩道を渡っている。
②	駐輪禁止場所で駐輪をしている。
③	電車内で通話をしている。
④	優先されるべき人がいる中で、若者が優先座席に座っている。
⑤	車の後部座席でシートベルトをしていない。
⑥	ゴミをポイ捨てする。

社会的スキルの測定には、菊池章夫(2004)によるKISS-18を使用している。対人関係を円滑にできる能力の有無を尋ねる18項目の中から、測定に適切だと思われる8項目を使用した。社会的スキルは逸脱行動の中でも私語や携帯操作などの、周囲とコミュニケーションをとる行動に影響を与えられると思われる。そのため、18項目の中でも問2「①他人が話しているところに気軽に参加できる。」「⑤自分の感情や気持ちを素直に表現できる。」など会話の際の初歩的な能力に関する項目や、「④相手から非難されたときにも、それをうまく片付けることができる。」「⑥他人にやってもらいたいことを、うまく指示できる。」など状況の変化への対応力を尋ねる項目を選んだ。

**表4 社会的スキルに関する質問項目**

番号	項目
①	他人と話していて、あまり会話が途切れないほうだ。
②	気まずいことがあった相手と、うまく和解できる。
③	他人が話しているところに気軽に参加できる。
④	相手から非難されたときにも、それをうまく片付けることができる。
⑤	自分の感情や気持ちを素直に表現できる。
⑥	他人にやってもらいたいことを、うまく指示できる。
⑦	身近な人たちとの間でトラブルが起きてもそれをうまく和解できる。
⑧	周りの人たちが自分とは違った考えを持っていてもうまくやっていける。

学生重視の価値観を測定する項目は、福田(2008)の「10代重視の価値観に関する項目」を参考に、独自で作成した。問1「①将来どうなるかよりも、今やりたいことをやるべきだ。」「②人生で一番楽しい時期は、学生の今しかないはずだ。」「③学生のうちに、遊べるだけ遊んでおくべきだ。」「④学生だから許されると思うことがある。」の4項目であり、回答者が「学生である現在」への特別な感覚をもっているかどうかを尋ねる項目となっている。さらに、問1には「⑤学生だから許されると思うことがある。」「⑥自分の将来について具体的に考えていない。」の2項目があるが、これらは10代の中高生が、社会へ出る前のモラトリアム期である10代のうちに出来るだけ人生を楽しもうとするという傾向がある(村岡清子, 1996)ことを参考に、独自で作成した項目である。

**表5 学生重視の価値観に関する質問項目**

番号	項目
①	① 将来どうなるかよりも、今やりたいことをやるべきだ。
②	② 人生で一番楽しい時期は、学生の今しかないはずだ。
③	③ ずっと学生でいたい。
④	④ 学生のうちに、遊べるだけ遊んでおくべきだ。
⑤	⑤ 学生だから許されると思うことがある。
⑥	⑥ 自分の将来について具体的に考えていない。

高校の逸脱行動を尋ねる項目においては、大学での講義中の逸脱行動とほぼ同じ項目で構成されているが、一つ異なる点として、問6「⑦漫画・読書をしていた」という項目を使用した。その理由としては、大学では、校内において学生の携帯電話の所持や使用は基本的に自由であるところがほとんどであるのに対し、高校ではそれが禁止されている学校もある。そこで、高校では授業中の携帯の操作に代わる逸脱行動として、授業とは関係のない私物の漫画や本を読むという行動がよく見られる経験が、筆者自身の経験としてあった。携帯電話は、他者とのコミュニケーションツールとしての機能の他に、動画や漫画など娯楽としての機能もあり、これは書籍の漫画と似た機能をしていると考えられたため、項目の挿入に至った。

**表6 高校時代の逸脱行動に関する質問項目**

番号	項目
①	① 講義とは関係のない話をしていた。
②	② 携帯を触っていた。
③	③ 講義とは関係のないことを考え話を聞いていなかった。
④	④ 居眠りをしていた。
⑤	⑤ 他の講義の課題をしていた。
⑥	⑥ 食事（飲料を除く）をしていた。
⑦	⑦ 漫画・読書をしていた。

逸脱者の有無は問9で項目化しているが、内容は問7と問8の回答者自身の逸脱行動を尋ねる項目とほぼ同様である。具体的には、以下の行動に当てはまる人はどのぐらいいましたか。という質問文に対し、選択肢を「誰もしていなかった」「1割程度がしていた」「3割程度がしていた」「半分以上がしていた」の4つとした。先行研究では、逸脱者がいるかいないかが逸脱行動の発生に関係するということであった。しかし実際に調査票で講義での逸脱行動の有無を尋ねる場合には、「いた」「いなかった」という2択にしてみると、回答者の多くが一人ぐらいは逸脱者はいただろうという心理になり、ほとんどが「いた」を選択してしまうと予想されたため、偏りを避けるべく、程度を問う選択肢とした。

**表7 逸脱者有無に関する質問項目**

番号	項目
①	① 講義とは関係のない私語をする。
②	② 携帯を触っている。
③	③ 講義とは関係のないことを考え、話を聞いていない。
④	④ 居眠りをする。
⑤	⑤ 他の講義の課題をする。
⑥	⑥ 食事をする。（飲料も含む）

さらに、問7から問9では、回答者が、講義中に逸脱者の有無を知覚した結果、自身の行動にどのような変化があったかを確認したかった。そのため、統一された正しい結果を得るために、回答者が受講している講義のうち、直近で受けた大講義を一つ想定した上で回答するように注意事項を加えた。また、逸脱行動が発生しやすいと思われるのは一般的には人数の多い講義だと考えられ、その多さの基準として、50人以上受講者がいるものを大講義と定義した。

問10から問14はフェイス項目であり、性別や家族構成、現在通っている大学の種類、直近の成績(GPA)、通っていた高校の偏差値を尋ねるものとなっている。問13の直近の成績(GPA)を尋ねる項目と、問14の高校の偏差値を尋ねる項目に関しては答えにくいと感じる回答者が多いと思われるため、回答方法は範囲選択の形をとった。

### 3.3 分析方法

分析には、「学生重視の価値観」「社会的スキル」「命令的規範」「記述的規範」「逸脱行動」の5尺度を、「あてはまる」あるいは「良いと思う」を1点、「どちらかといえばあてはまる」あるいは「どちらかといえば良いと思う」を2点、「どちらかといえばあてはまらない」あるいは「どちらかといえば良くないと思う」を3点、「あてはまらない」あるいは「良いと思う」を4点とし、逆転項目は「あてはまる」あるいは「良いと思う」を4点、「どちらかといえばあてはまる」あるいは「どちらかといえば良いと思う」を3点、「どちらかといえばあてはまらない」あるいは「どちらかといえば良くないと思う」を2点、「あてはまらない」あるいは「良くないと思う」を1点として扱い、その点数をそれぞれの尺度ごとに足し合わせた合計得点を、それぞれの尺度の得点とした。また、ここでの「逸脱行動」「高校時代の逸脱行動」が多いというのは、回答者の自己評価による逸脱行動の頻度の多さを示すものである。「逸脱者有無」については「誰もしていなかった」を1点、「1割程度がしていた」を2点、「3割程度がしていた」を3点、「半分以上がしていた」を4点とし、同様に合計得点により周囲の逸脱者の有無の認知度を測った。

上記の作業を行った後、統計処理にはSPSS Statistics バージョン25を用い、相関分析と重回帰分析の2通りの方法を行い、仮説を検証していく。

## 4.調査結果

### 4.1 記述統計の結果

#### (1) 「学生重視の価値観」

「学生重視の価値観」に関する項目の回答の度数分布は図1のようになった(n=95)。6項目のうち、「人生で一番楽しい時期は、今しかないはずだ」のみ肯定的な回答が47.4%であった。しかし、それを除いた5項目は、「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」の肯定的回答が5割以上という結果になった。特に、「学生のうちに遊べるだけ遊んでおくべきだ」については8割を超える学生が「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」と回答している。

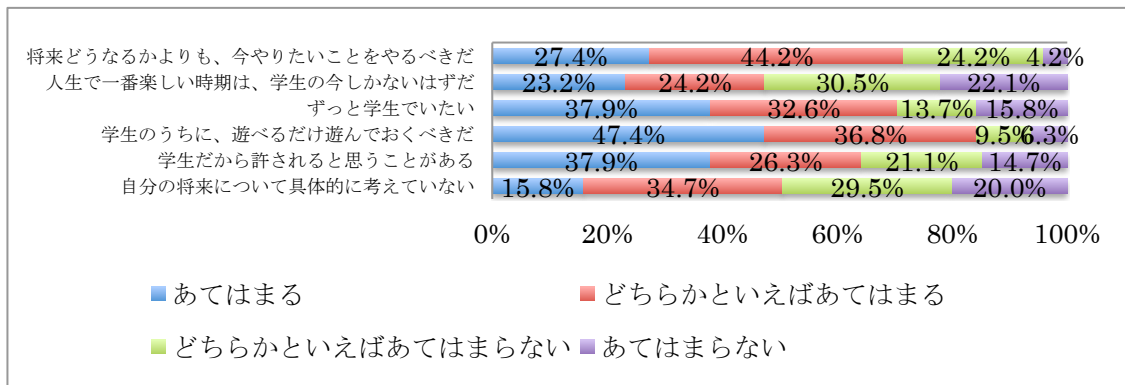


図2 「学生重視の価値観」に関する項目の回答

(2) 社会的スキル

「社会的スキル」に関しても全8項目すべてが通常項目である(n=95)。この尺度では「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」のように社会的スキルがあると答えた人は、おおよそすべての項目で5割前後見られたが、「他人が話しているところに気軽に参加できる」のみ48.4%と、5割以下であった。それに対し、「身近な人たちとの間でトラブルが起きてもそれをうまく和解できる」で肯定的な回答をした人は7割以上、「周りの人たちが自分とは違った考えを持っていてもうまくやっけていける」は8割以上という結果であった。【図2挿入】

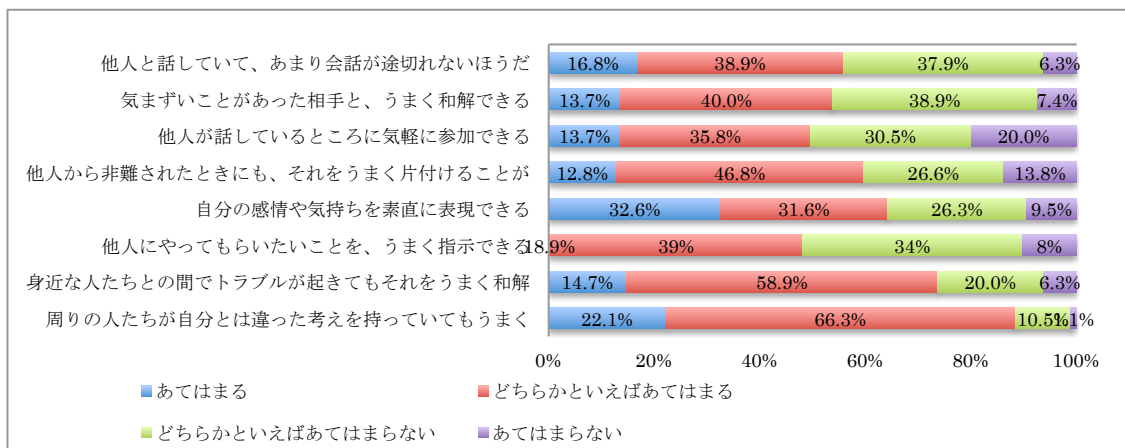


図3 「社会的スキル」に関する項目の回答

(3) 高校時代の逸脱行動

この変数の項目においても、7項目すべてが通常項目である(n=95)。高校時代の授業中での逸脱行動として「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」と答えた割合は、多い順に、居眠り、他の講義の課題、うわのそらであり、これらは6割前後という結果が得られた。一方で、携帯操作や食事、漫画・読書は3割以下であった。「あてはまる」の割合が最大であった行動は「居眠り」で32.6%、「あてはまる」が最小の行動は食事で8.4%であった。【図4挿入】



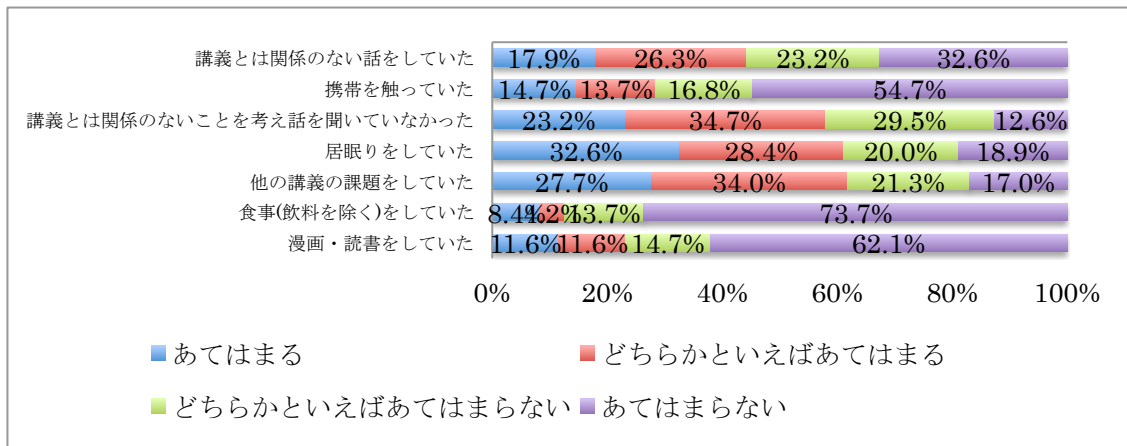


図4 「高校時代の逸脱行動」に関する項目の回答

(4) 命令的規範意識

図5を参照すると、13項目のうち2項目が逆転項目になっている(n=95). 回答結果は「車の後部座席でシートベルトをしていない」の68.4%を除いたすべての項目において、7割以上の学生が、規範に則るという意思を示している. 一方で、問3の「自分がやりたくないことは人にやらせる」という項目については、規範意識の低い回答が2割を超える結果となっている. 【図5挿入】 【図6挿入】

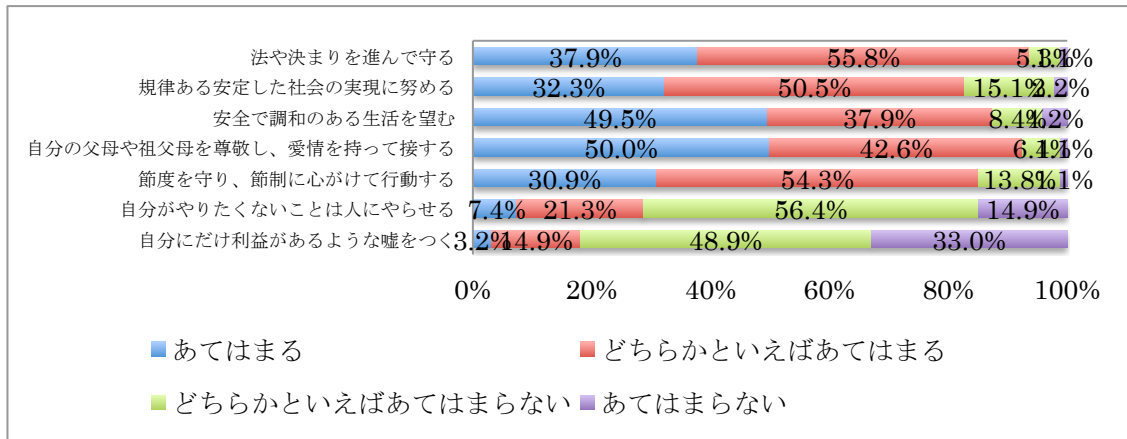


図5 「命令的規範意識」に関する項目の回答1

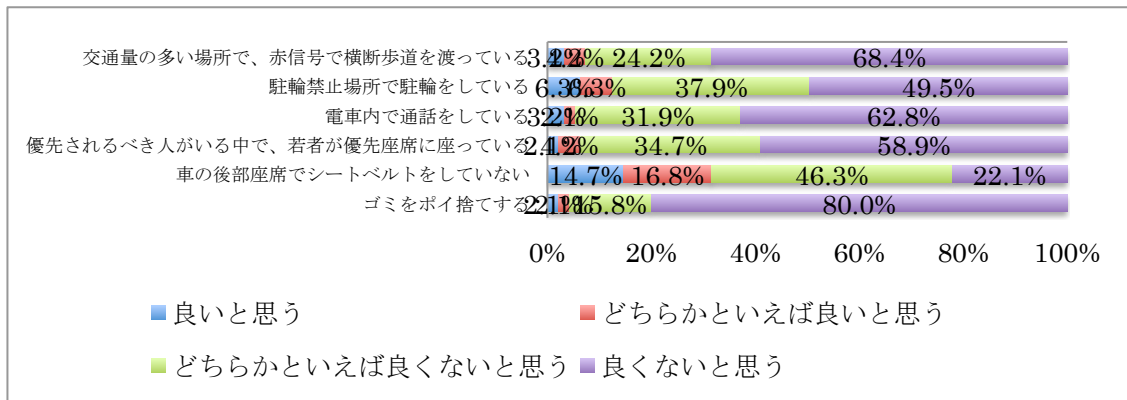


図6 「命令的規範意識」に関する項目の回答2

(5) 記述的規範意識

6項目中3項目が逆転項目である(n=95). 全体的に、「どちらかといえばあてはまる」や「どちらかといえばあてはまらない」の回答の割合が多く、同調思考の高い回答が多く見られた. しかし、「私は、自分が従うグループを見つけるより、むしろ人生で私自身の道を作ることを好む.」「話し合いの中で周りが意見を変えても、私は最後まで意見を変えない.」の二つの項目に注目すると、前者における肯定的回答が45.2%と半数近くであるのに対し、後者における肯定的回答は32.7%で3割程度であり、記述的規範意識のポイントが低くなるものの中にも差が見られた. 【図7挿入】

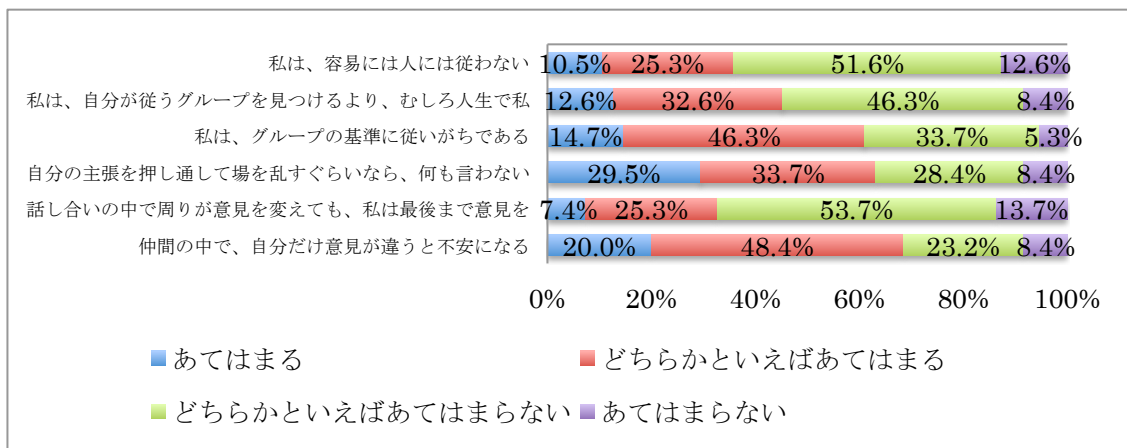


図7 「記述的規範意識」に関する項目の回答

(6) 逸脱者有無

この変数では直近の大講義にて確認できた逸脱行動の割合をたずねており、6項目のうち逆転項目はない(n=95). 「半分以上がしていた」割合が最大の逸脱行動は「携帯を触っている」で58.9%であり、最小は「他の講義の課題をする」で9.5%であった. 逆に、「誰もしていなかった」割合が最大の逸脱行為は「食事をする」で44.2%, 最小は「居眠り」で10.5%であった. 図8より、「3割程度がしていた」「半分以上がしていた」の割合の合計の多い順に3つ挙げると、「携帯を触っている」84.2%、「講義とは関係のないことを考え、話を聞いていない」72.3%、「居眠りをする」60.0%となっている.

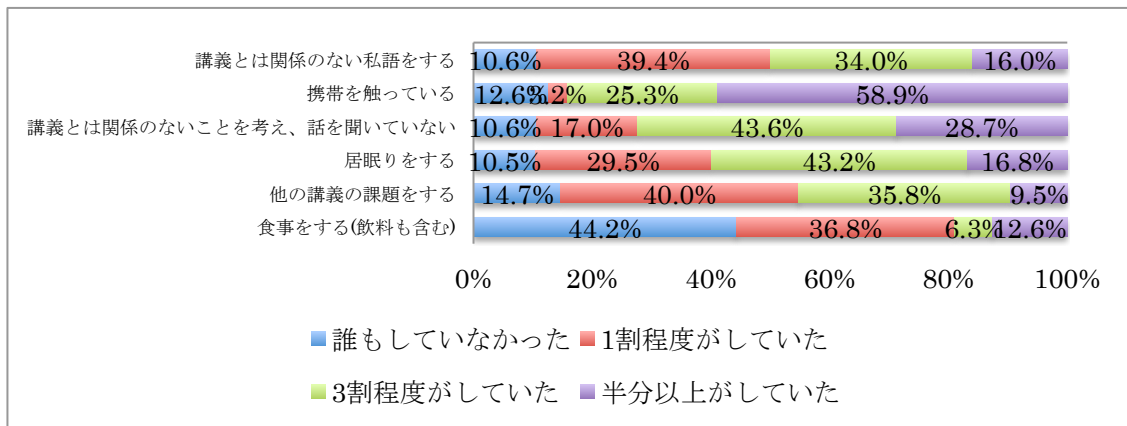


図8 「逸脱者有無の認知」に関する項目の回答

### (7) 逸脱行動

逸脱行動変数は、6項目すべてが通常項目となっている(n=95)。図9によると、全体として回答にややばらつきが見られ、6項目中、「あてはまる」を回答した割合は「携帯を触っている」が51.6%で最大、次に「講義とは関係のないことを考え、話を聞いていない」が33.7%であった。後者に関しては「どちらかといえばあてはまる」を含めると73.7%を占める結果になった。

「講義とは関係のない私語をしている」と「食事をする(飴やガム、飲料を除く)」については、「あてはまる」が15.8%と12.6%となっており、食事については「どちらかといえばあてはまる」を含めても17.9%と低い割合であった。

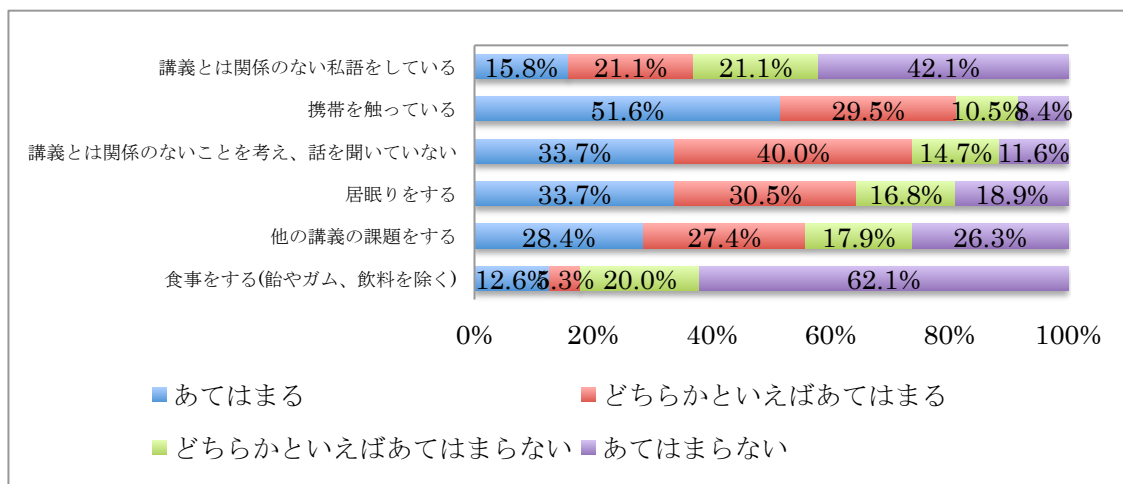


図9 「逸脱行動」に関する項目の回答

### 4.2 相関分析の結果

従属変数である「学生重視の価値観」「社会的スキル」「高校時代の逸脱行動」「逸脱者有無の認知」「記述的規範意識」「命令的規範意識」の6変数と、フェイス項目である年齢を18歳と19歳,20歳と21歳,22歳と23歳と24歳の3段階に分けた「年齢段階別」、数値化された「大学の種類」,「男性ダミー」を従属変数として入れ込み、独立変数としては「逸脱行動」と、逸脱行動の項目6つを投入し、相関分析をした。その結果、「逸脱行動」については3つの変数と相関関係がみられた。表8をみると、「学生重視の価値観」と「逸脱行動」は10%水準で有意であり、正の相関があった。「高校時代の授業逸脱行動」と「逸脱行動」は1%水準で有意であり、正の相関があった。また、「命令的規範意識」と「逸脱行動」では5%水準で有意、負の相関があった。つまり、学生重視の価値観が高い学生と、高校時代授業中に逸脱行動をよくしていた学生は、大学の講義中の逸脱行動の発生に何らかの影響があるといえる。また、マナーやルールを意味する命令的規範意識の高さは、逸脱行動発生の抑制になんらかの影響があるといえる。

表 8 各変数間の相関分析

	学生重視の価値観	高校時代の逸脱行動	命令的規範意識
学生重視の価値観	—	.125	.081
高校時代の逸脱行動	.125	—	-.165
命令的規範意識	.081	-.165	—
逸脱行動	.198*	.581***	-.243**

\*相関係数は 10% 水準で有意 (両側) です。

\*\*相関係数は 5% 水準で有意 (両側) です。

\*\*\* 相関係数は 1% 水準で有意 (両側) です。

逸脱行動の各項目については、「講義とは無関係の私語」に対しては「学生重視の価値観」が 5%水準で有意、「高校時代の逸脱行動」が 1%水準で有意な結果となり、どちらも正の相関がみられた。「携帯操作」に対しては「高校時代の逸脱行動」が 1%水準で有意、正の相関であった。「うわの空」は「学生重視の価値観」「高校時代の逸脱行動」「命令的規範意識」が順に 10%, 1%, 5%水準で有意であった。表 2 より、「うわの空」と「命令的規範意識」の間では負の相関が確認できる。

表 9 各変数と「うわの空」の相関分析

	学生重視の価値観	高校時代の逸脱行動	命令的規範意識
学生重視の価値観	—	.125	.081
高校時代の逸脱行動	.125	—	-.165
命令的規範意識	.081	-.165	—
うわの空	.181*	.385***	-.226**

\*相関係数は 10% 水準で有意 (両側) です。

\*\*相関係数は 5% 水準で有意 (両側) です。

\*\*\* 相関係数は 1% 水準で有意 (両側) です。

そして「居眠り」に対して、「学生重視の価値観」が 10%水準で有意、「高校時代の逸脱行動」が 1%水準で有意、どちらも正の相関であった。「他の講義の課題」は「社会的スキル」「高校時代の逸脱行動」「年齢段階別」と相関がみられ、「年齢段階別」のみ負の相関であった。

表 10 各変数と「他の講義の課題」の相関分析

	社会的スキル	高校時代の逸脱行動	年齢段階別
社会的スキル	—	.226**	.092
高校時代の逸脱行動	.226**	—	.046
年齢段階別	.092	.046	—
他の講義の課題	-.174*	.331***	-.170*

\*相関係数は 10% 水準で有意 (両側) です。

\*\*相関係数は 5% 水準で有意 (両側) です。

\*\*\* 相関係数は 1% 水準で有意 (両側) です。

「食事」に対しては、「社会的スキル」「高校時代の逸脱行動」「命令的規範意識」に相関がみられ、「命令的規範意識」のみ負の相関であった。以上より、「高校時代の逸脱行動」はすべての項目と1%水準で有意、正の相関がみられた。

### 4.3 重回帰分析の結果

重回帰分析は、従属変数を「逸脱行動」と、逸脱行動の各項目の2種類に分けて行った。

#### (1) 逸脱行動全般の重回帰分析の結果

まず、本調査において独立変数に設定している6変数と、逸脱行動を重回帰分析した。その結果、「学生重視の価値観」が5%水準で有意、「高校時代の逸脱行動」が1%水準で有意であり、どちらも「逸脱行動」に対しプラスの効果があるという結果になった。

しかし、男性を1、女性を0に数値化した「男性ダミー」を投入した結果、「学生重視の価値観」が5%水準で有意、「高校時代の逸脱行動」が1%水準で有意という結果は変わらなかった。

さらに、「男性ダミー」に加えて「国公立ダミー」を投入し重回帰分析をしたところ、「学生重視の価値観」「高校時代の逸脱行動」に加えて「男性ダミー」も5%水準で有意となり、「逸脱行動」にマイナスの効果があることが明らかになった。表11より、標準化回帰係数を比較すると、影響の強さは「男性ダミー」「学生重視の価値観」「高校時代の逸脱行動」の順番で「逸脱行動」に影響しているといえる。

表 11 逸脱行動を重回帰分析した結果

独立変数	モデル1		
	$\beta$	SE	有意確率
学生重視	.213	.148	**
社会的スキル	.02	.115	
高校時代の逸脱行動	.52	.95	***
命令的規範意識	-.117	.099	
記述的規範意識	-.084	.159	
逸脱者有無	-.126	.126	
年齢段階別	-.123	.731	
国公立ダミー	.203	1.163	*
男性ダミー	-.209	.979	*
R2乗		.368	
N=75			

a 従属変数 逸脱行動

注 \*  $p < .1$ , \*\*  $p < .05$ , \*\*\*  $p < .01$

#### (2) 個別の項目の重回帰分析の結果

次に、逸脱行動の要素である講義と無関係の私語、居眠り、携帯の操作、うわの空、他の講義の課題、食事の6つをそれぞれ従属変数として分析を行った。また、上記の変数の重回帰分析において、「男性ダミー」と「国公立ダミー」が変数に影響していることがわかったので、要素ごとの分析では、初めからこれら2つの変数を入れて分析をした。表5、表12より、その他の要素と変数の分析結果を順に述べていくと、「講義と無関係の私語」に対しては「高校時代の逸脱行動」が1%水準で有意、プラスの効果がある。「男性ダミー」が5%水準で有意、マイナスの効果があることがわかった。「携帯操作」「うわの空」に対し

ては「高校時代の逸脱行動」が1%水準で有意、プラスの効果がある。この結果より、仮説3「うわの空の発生には、命令的規範意識の高低が最も影響を与える」を検証する。「うわの空」に対して「命令的規範意識」の有意確率は15.6%であり、有意とはいえない。さらに、「うわの空」に影響があると思われる変数は「高校時代の逸脱行動」のみであり、重回帰分析の結果からは仮説3は立証されなかった。「居眠り」については「学生重視の価値観」が10%水準で有意、「高校時代の逸脱行動」が1%水準で有意でありどちらもプラスの効果が見られた。「他の講義の課題」に対しては「社会的スキル」が10%水準で有意、「男性ダミー」が5%水準で有意でどちらもマイナスの効果を確認できる。「高校時代の逸脱行動」は1%水準で有意、「国公立ダミー」は5%水準で有意であり、プラスの効果があるといえる。また、「他の講義の課題」については「男性ダミー」と「国公立ダミー」の影響の強さは、後者のほうが標準化回帰係数が0.019ポイント高く、影響がより強いといえる。以上の結果より、重回帰分析においても「高校時代の逸脱行動」はすべての要素に対して1%水準で有意であり、プラスの効果があることが確認できた。「食事」については「社会的スキル」「高校時代の逸脱行動」「命令的規範意識」「国公立ダミー」「男性ダミー」の5つの変数からの影響が見られた。そのうち、「命令的規範意識」「男性ダミー」からはマイナスの効果を確認できる。

表12 私語，携帯操作，うわの空を重回帰分析した結果

独立変数	モデル2(私語)			モデル3(携帯操作)			モデル4(うわの空)		
	$\beta$	SE	有意確率	$\beta$	SE	有意確率	$\beta$	SE	有意確率
学生重視	.162	.035		.066	.033		.139	.031	
社会的スキル	.126	.028		-.156	.026		-.065	.025	
高校時代の逸脱行動	.464	.022	***	.496	.021	***	.498	.02	***
命令的規範意識	-.1	.025		.002	.023		-.163	.022	
記述的規範意識	-.021	.038		-.105	.036		-.056	.034	
逸脱者有無	.008	.029		.097	.027		-.009	.026	
年齢段階別	-.116	.174		-.054	.162		-.032	.154	
国公立ダミー	.125	.285		.108	.266		-.029	.253	
男性ダミー	-.247	.239	**	-.123	.223		-.079	.212	
R2乗	.267			.184			.247		
N=79	N=79			N=79			N=79		
a 従属変数 私語			a 従属変数 携帯操作			a 従属変数 うわの空			

注 \* p < .1, \*\* p < .05, \*\*\* p < .01

表13 居眠り，他の課題，食事を重回帰分析した結果

独立変数	モデル5(居眠り)			モデル6(他の課題)			モデル7(食事)		
	$\beta$	SE	有意確率	$\beta$	SE	有意確率	$\beta$	SE	有意確率
学生重視	.199	.04	*	.158	.04		.074	.034	
社会的スキル	-.037	.032		-.212	.031	*	.198	.027	*
高校時代の逸脱行動	.365	.025	***	.39	.025	***	.454	.022	***
命令的規範意識	-.034	.028		-.044	.028		-.19	.024	*
記述的規範意識	-.091	.044		-.096	.043		.05	.037	
逸脱者有無	-.131	.033		-.045	.032		-.109	.028	
年齢段階別	-.027	.198		-.124	.195		-.087	.169	
国公立ダミー	.14	.325		.257	.319	**	.194	.277	*
男性ダミー	-.135	.272		-.238	.268	**	-.188	.232	*
R2乗	.105			.200			.288		
N=79	N=79			N=79			N=79		
a 従属変数 居眠り			a 従属変数 他の課題			a 従属変数 食事			

注 \* p < .1, \*\* p < .05, \*\*\* p < .01

以上より、逸脱行動の要素ごとの分析からは、男性よりも、女性であるほうが「講義とは無関係の私語」と「他の講義の課題」の発生確率が高いといえる。さらに、私立大学の学生であるよりも、国公立大学の学生であるほうが「他の講義の課題」の発生する確率が高いといえる。

## 5. 考察

### 5.1 相関分析の考察

今回の調査における変数同士の分析では、表 8 をみると「学生重視の価値観」「高校時代の逸脱行動」「命令的規範意識」と、「逸脱行動」との間に影響があることがわかる。これより、10 代を調査対象にした福田(2008)の研究において述べられていたような、ある時期に対して特別な意味を感じる感覚が、20 代を含む学生においても当てはまり、それが逸脱行動に影響することが証明された。また、相関分析の結果より、「高校時代の逸脱行動」と大学における「逸脱行動」との間に明白な関係性がある。この結果から考えられるのは、学生の逸脱行動が高校時代や、もしくはそれ以前からの習慣によるものだというのである。さらに、「命令的規範意識」と「逸脱行動」の間にも関係性が確認されたが、ここで興味深いのは、規範意識のなかでも「記述的規範意識」は「逸脱行動」に相関はみられず、「命令的規範意識」のみに相関が見られたということである。ここで、Cialdini (2010)の社会的証明(social proof)を用いてこの結果を解釈すると、この原理は特定の状況において、ある行動を行う人が多ければ多いほど、それが正しい行動になるため、「逸脱行動を行わない」という行為がその社会的証明になっていたとも考えられる。もう一つの可能性として、このような規範意識を問う調査においては回答者の社会的望ましきバイアスの影響があり、正確な回答とは言い切れない可能性が考えられる。社会的望ましきとは、回答者が社会的に好まれるような回答をしようという心理になることである。

独立変数と、従属変数の要素ごとの分析において、「学生重視の価値観」が、「講義とは無関係の私語」「うわの空」「居眠り」の3つの従属変数と相関が見られた理由を以下のように考える。これら3つの要素は、「他の講義の課題」や「食事」に比べ、講義中にしばしば見られる不真面目な講義態度であり、集中の途切れたときなどに、罪悪感やマナー違反という認識を伴いながらもしてしまう行為だと思われる。また、「学生重視の価値観」は、学生である現在に価値があるとする考え方である。学生重視の価値観の高さが学生のうちであれば許されることもあるという感覚に結びつき、そういった感覚からの影響が大きい行為が、この3つだったと考えられる。「携帯操作」にも同じことがいえるが、携帯の操作においては講義内容のリサーチなど、その行為が必要とみなされる場合もあるため、今回は相関があるとはいえない結果になったと考えられる。

次に、表 9 からは「命令的規範意識」は「うわの空」「食事」の抑制になんらかの影響があることがわかったが、「うわの空」の発生要因としては、講義への意欲や講義内容の難易度などが考えられ、他者との関係性によって発生する行動ではなく、行為者本人の特性の関連が強いと考えられ、予想範囲内の結果となった。また、「私語」「携帯操作」は状況によっては講義内容の不明点を解決するために使用するなど、必ずしも悪いとはいえない場合があるのに対し、「うわの空」「食事」は講義中においては明らかにすべきでない行為であるので「命令的規範意識」との関連がより強かったと考えられる。

表 10 からは、「社会的スキル」「年齢段階別」と「他の講義の課題」にも負の相関が確

認できた。回帰分析の結果も考慮する必要があるが、「年齢段階別」と「他の講義の課題」に負の相関が見られたのは、多くの学生が年齢とともに学年もあがり、1, 2 回生よりも 3, 4 回生の方が、授業数が減少することが多いため、その結果だと考えられる。

出口・吉田(2005)は、研究の中で「大学生活の目的」と私語発生の関連について検討しているが、講義に取り組む姿勢として「うわの空」に対してもなんらかの関連があった可能性があり、検討の余地を残す結果となった。

## 5.2 重回帰分析の考察

### (1) 逸脱行動全般の重回帰分析の考察

「男性ダミー」「国公立ダミー」の投入によって結果に変化が見られたが、まず明らかにいえることは「国公立ダミー」は「男性ダミー」へ影響しているということである。これは、重回帰分析の結果における比較からも確認できる。重回帰分析の結果からは、男性よりも女性であることの方が、逸脱行動が多くなり、本調査においてはその影響が最も強いといえる。つまり、国公立大学の男性は逸脱行動が少ないといえる。さらに、「国公立ダミー」は「学生重視の価値観」の標準化回帰係数、有意確率の数値を変動させており、影響が確認できる。しかし、本調査における限界点として、国公立大学と私立大学の比率の差が挙げられる。今回の調査では私立大学が 75.8%(n=72)であるのに対し、国公立大学は 24.2%(n=23)である。そのため、学生や講義の規模の違いなどの環境の違いが結果に影響したとも考えられる。一概にはこの結果が一般的な国公立大学の傾向だとは言いきれないが、本調査に関しては国公立大学であることが男性の逸脱行動を減少させているといえる。

### (2) 個別の項目の重回帰分析の考察

逸脱行動の要素ごとの分析結果より、女性のほうが「講義と無関係の私語」の発生が多いことがわかった。坂田(2014)は男女の行動や志向性の違いに関する研究の中で、一般的には女性は男性に比べて共同的な興味や価値を強く示すことを述べている。ここでいう共同的とは、他者を助けたり、ケアしたりすることである。つまり、他者とともに何かに取り組むことを好む。これを参考にすると、講義中においても興味の共有や他者に関わろうとする傾向があるといえ、そのため私語の発生につながると考えられる。「携帯操作」と「うわの空」の発生への影響は、重回帰分析においては「高校時代の逸脱行動」のみであった。この二つは、他の逸脱行動の要素と比較すると周囲からみて「逸脱行動」であると判断しにくいものである。そのため、講義中の習慣的な行動になりやすいのではないかと考えられる。また、男性よりも女性の方が、「他の講義の課題をする」ことが多く、私立大学よりも国公立大学であるほうが、「他の講義の課題をする」ことが多いという結果から、国公立大学の女性は「他の講義の課題をする」ことが、他の要因と比較して多いことがわかった。しかし、このような結果になった背景には、国公立大学での回答者の属性が関係していると考えられる。国公立大学での調査協力者は、ほとんどが理系学生の男性で構成されているグループであった。そのため、講義の規模が文系学生の講義とは異なり、講義中の行動にも違いが生じると考えられる。今回の調査においては少数の国公立大学の女性の回答結果が大きく影響した可能性がある。また、このような理系と文系の講義の規模の違いを想定できなかったことは本調査における限界点である。

最後に、重回帰分析の結果をみても、やはり逸脱行動の発生には「高校時代の逸脱行動」



が最も強く影響していた。この、高校時代の逸脱行動が多い人ほど、大学時代の逸脱行動が多いという結果は常識的な結果に思えるが、福田(2008)のいう「10代のうちに遊んでおくべき、という考えが、10代のうちならば多少の非行も許されるという感覚に結びついているのではないか」という点が20代を迎える大学生になっても継続していると考えられる。Elicsonのいうモラトリアム期においては、青少年は自分の生き方を模索し大人への準備をするという。本調査においては年齢の割合は、21歳が最も多く占める32.3%(n=31)であった。この結果より、先行研究に示されていた逸脱行動の発生要因を10代重視の価値観と考えるよりも、学生であることへの重視のほうがより強く影響していると考えられる。また、逸脱行動の発生に「高校時代の逸脱行動」の影響が最も影響しているという結果から、逸脱行動の発生要因は、大学での講義中の状況や個人特性といった外部、内部の要因が影響しているというよりは、学生らの講義中の行動が習慣づいたものであるとも考えられる。そのため逸脱行動の発生要因の調査の今後の課題としては、中学時代や高校時代の過ごし方や家庭状況といったところまで調査の必要があると思われる。

## 6. 結論

さいごに、仮説の検証をすると、仮説1は「逸脱行動の発生には、社会的スキルよりも、逸脱行動の有無の認知がより強く影響する」というものであったが、「社会的スキル」「逸脱者有無」と「逸脱行動」のあいだに相関は見られず、仮説1は支持されなかった。「社会的スキル」は出口・吉田(2005)が私語の発生要因を研究する際に用いられた変数であり、私語との関連がみられている。本調査では、講義中には望ましくないといわれるいくつかの行動を足し合わせ「逸脱行動」とし、「社会的スキル」とは関連がない要素も含めてしまっていたため、関連がみられなかったと考えられる。また、本調査では逸脱者有無の認知と逸脱行動との関連もみられなかった。しかし、相関分析の結果では「逸脱者有無」と「命令的規範意識」の間に相関がみられ、プラスの効果があった。そのため、出口(2014)のいう、逸脱者が存在している状況であるかどうかは逸脱頻度や規範意識との関連の方向性を規定しているということについては部分的に実証された。また、仮説2は「逸脱行動の発生には、学生重視の価値観よりも、逸脱行動の有無の認知がより強く影響する」というものであったが、相関分析と重回帰分析両方の結果から、関係性は「学生重視の価値観」と「逸脱行動」のみであり、むしろ「学生重視の価値観」が高いほど「逸脱行動」の発生も多くなるという結果となった。そのため、仮説2は支持されなかった。仮説3については相関分析からは「学生重視の価値観」と「うわの空」のあいだで相関がみられたが、重回帰分析においては「うわの空」に対する「学生重視の価値観」の影響はみられなかった。結果として、仮説3は支持されなかった。

本調査において、逸脱行動の発生に最も影響を与える要因は「高校時代の逸脱行動」であることが明らかになった。そのため規範意識の高低が逸脱行動に影響しているとはいえない。この結果より逸脱行動の発生には、学生らの講義中の行動の習慣化に問題点があるように思われるため、十分な知識や能力の取得のためには講義規模やスタイルの変更など学生の主体性に委ねるだけでなく、主体的に学問に取り組めるような環境づくりをすることも方法の一つであると考えられる。本調査では規範意識に焦点を置き調査を進めたが、回答者による社会的望ましさのバイアスが可能な限り取り除くことができたとはいえない、

そのため質的な調査も含めた検討が必要であると考えられる。

## 謝辞

ご指導してくださった立木先生，マグワイア先生に深く感謝しています。また、調査に快く協力して下さった皆様、本稿執筆に関わって下さった皆様に、心よりお礼申し上げます。ありがとうございました。

## 7. 参考文献

- Cialdini, R.B., Reno, R.R., & Kallgren, C.A., 1990,  
A focus theory of normative conduct:  
Recycling the concept of norms to reduce littering in public places. *Journal of Personality and Social Psychology*, 58, 1015-1026.
- Cialdini, R.B., 2001, *Influence: Science and Practice, 4th Edition*,  
Arizona State University  
(=2010, 社会行動研究会訳『影響力の武器—なぜ、人は動かされるのか』誠信書房).
- 出口拓彦, 2014, 「規範逸脱行動に対する行動基準と態度」『奈良教育大学  
教育実践開発研究センター研究紀要』23 : 81-88
- 出口拓彦・吉田俊和, 2005, 「大学の授業における私語の頻度と規範意識・個人特性との  
関連：大学生生活への適応という観点からの検討」『社会心理学研究』21(2) : 160-169.
- 独立法人日本学生支援機構, 2018, 「平成28年度学生生活調査」独立行政法人日本学生支援  
機構ホームページ(2018年11月21日取得,  
[https://www.jasso.go.jp/about/statistics/gakusei\\_chosa/\\_icsFiles/afieldfile/2018/06/01/data16\\_all.pdf](https://www.jasso.go.jp/about/statistics/gakusei_chosa/_icsFiles/afieldfile/2018/06/01/data16_all.pdf)).
- Erik H. Erikson, 1968, *IDENTITY Youth and Crisis*, W. W. Norton & Company, Inc.  
(=2017, 中島由恵『アイデンティティ—青年と危機』新曜社).
- Fauconnet, Pail, 1922, “Introduction”, in Durkheim, E, L’ Education Morale, Felix Alcan  
(=1964→2010, 麻生誠・山村健訳, 『道徳教育論(1)』講談社) .
- 福田舞, 2009, 「現代青少年の逸脱行動と背景要因の検討：時間的展望に着目して」  
『人間文化創成科学論叢』11 : 329-337.
- 菊池章夫, 2004, 「KISS-18研究ノート」『岩手県立大学社会福祉学部紀要』6(2) : 41-51.
- 北折充隆・吉田俊和, 2000, 「違反抑止メッセージが社会規範からの逸脱行動に及ぼす  
影響—大学構内の駐輪違反に関するフィールド実験—」『実験社会心理学研究』  
40 (2000-2001) (1) : 28-37.
- 小林久高, 1991, 「社会規範の意味について」『社会学評論』42(1) : 32-46.
- 村岡清子, 1996, 『少女のゆくえ』, 青樹社
- 文部科学省, 2011, 「大学教育の質の保証・向上」, 文部科学省ホームページ,  
(2018年2月7日取得,  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/attach/](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/attach/)

- 1302346.htm).
- , 2016, 「大学生の学習実態に関する調査研究について(概要)」, 文部科学省ホームページ, (2018年2月7日取得,  
[http://www.nier.go.jp/05\\_kenkyu\\_seika/pdf06/gakusei\\_chousa\\_gaiyou.pdf](http://www.nier.go.jp/05_kenkyu_seika/pdf06/gakusei_chousa_gaiyou.pdf)).
- , 2009a, 「大学における教育内容・方法の改善等について」,  
文部科学省ホームページ, (2018年2月7日取得,  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/daigaku/04052801/002.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/002.htm)).
- , 2009b, 「我が国の高等教育の将来像(答申)第1章」, 文部科学省ホームページ,  
(2019年1月23日取得,  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/attach/1335581.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/attach/1335581.htm)).
- 長沼恭子・落合良行, 1998, 「同性の友達とのつきあい方からみた青年期の友人関係」,  
『青年心理学研究』10: 35-47.
- 中山康雄, 2004, 『共同性の現代哲学—心から社会へ』勁草書房.
- 沖清豪・杉谷裕美子・山田礼子・相原総一郎, 2004, 「大学生の教育効果に関する研究—2004年度試行調査から—」『日本教育社会学会大会発表要旨集録』, 297-301,  
(2018年2月8日取得,  
[http://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo\\_10620205\\_poART0006308441.pdf?contentNo=1&alternativeNo](http://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo_10620205_poART0006308441.pdf?contentNo=1&alternativeNo)).
- 坂田桐子, 2014, 「選好や行動の男女差はどのように生じるか—  
性別職域分離を説明する社会心理学の視点」日本労働研究雑誌, 56(7): 94-104.
- 高木彩・村田光二, 2005, 「注目する規範の相違による社会的迷惑」『社会心理学研究』  
20(3): 216-223.
- 手島啓文・安保英勇, 2017, 「道徳的尺度の開発と信頼性・妥当性の検討」,  
『北海道心理学研究』39: 30.
- 横田晋大・中西大輔, 2011, 「同調尺度の作成—規範的影響と情報的影響—」  
『広島修大論集』51(2): 23-36.
- 吉田俊和・斎藤和志・北折充隆編, 2009, 『社会的迷惑の心理学』ナカニシヤ出版.